



會報

第五年第十号

昭和九年十一月一日發行

通巻第四十号

神河内から船津町高山方面へ

僕の方の會社に神岡鉱山と云ふ古い金屬山がある。鉛、亜鉛、金、銀と云ふ種々馬鹿にならない宝物が出る山である。此の山の見物が主となつて先月二十二日関西地方の大暴風の直後に東京を立つた。其時の思出を少々書かして貰ふ事にする。

「第一日」神河内ホテル泊り

二人泊り部屋代金二十二円と云ふ生れて初めての高價な泊り賃を三食付十五円に値切つた。部屋代金の二十二円を三食付十五円とはよくも思切つた値切り方であるが又反対によくも思切つて値下げしたものである。

是には少々手がある。正面からこんな話を持込んだら二ツの返事で断られるに決つて居る。此処に秘傳があるが何も先方でも確か貰つた代金數十円が何時の間にか拾五円に落つて居た、いや木の

葉だつたなんて云ふ非科学的なものではない。正々堂々と永久不変の拾五円である（但し二人分なり）

が但し二度目は成功するか、どうか分らない。ホテルは登山の爲めには會員諸兄にお奨め出来ない。が新婚旅行には良いでせう。

二人部屋三食付三十円も出せば二階の文派な部屋が借りられるんだからね。

僕が行つた神河内は如何にも秋の落付いたそして何となく冬枯への淋しい神河内ではあつたが其処に感られた数々の昔の物語を独り憶ひ眺けるに通はしい日であつた。

ホテルの欄杆から梓川の流れや森の私語に耳を傾けて居ると丁君の学生時代良く歌つた歌の一節が聞えてくる様な気がしてならなかつた。懐かしいそして返らぬ華やかな学生時代の繪巻物が僕の胸一杯に展げられた。

誠に淡い嬉しい一時であつたが覺めれば夢い一片の幻であつた。

「第二日」神河内—平湯—船津町

朝はから酒を飲んで居る會社の老人連をせき立て、安房峠を越した。来年には中の湯から平湯へ自動車を通るやうだ。

あの静かな安房峠に自動車の警笛がブー／＼な
るかと思へばいやになる。

峠に来ると平湯の対山旅館から迎ひの若衆が来
て老人連を労はってくれた。此若衆と色々話をし
て居る間に私は突然喜びの餘り若衆の手を握りし
めたい衝動にかられた。

あゝ今から何年前であつたらう。僕が檜燕班の
リーダーとして神河内から更に此平湯を経て乗鞍
に登つたのは!! 其時平湯から連れな一人の人天
こそ此若衆の約十年程前の姿であつたのだ。

其時一仙の美しい飛騨の山刀を廻つて僕と其人
夫とは半日に涉つて交渉を続けた。若衆は何年の
間か腰に離さずつけて居た愛刀には到底普通人の
想像もつかない愛着を持つて居た、それを到々乗
鞍の頂上に於て淡々と手放なした。金五円也
是れは愛刀の身受金であつた。此の山刀の話が全
く偶然に二人の間に立たのは偶然とは云え誠に不
思議な因縁である。

そして恐らく其愛刀の一件がなければ十年後に
會つた僕と彼とは全くのストレンジヤーで別れて
しまつたであらうに。

過日国立の山岳部室に泊りに行つた時優美の山
刀を見て感慨新らたなるものがあつた。

扱ても話はすつかり脱線してしまつたが平湯から
八里、自動車で高原川に沿つて下る神岡鉾山柄洞
に着いたのは午後四時頃、是れから疲れた足をひ
き／＼坑内見学である。

先ず坑内電車に乗せて貰らつて二十五山と
云ふ山の文字通りの真中に這入つて行つた。此の
山が室の山である。金山更鉛鉱の塊りと云つて差
支えない。今後三十年位採鉱しても此の山全体か
ら見れば極く少部分に過ぎないと云ふから大した
ものだ。石炭山と異つて全然瓦斯がないから坑内
でも平気で煙草が飲める。色々珍らしい実演をし
てくれた。

それから直に物運く早いエレベーターで頂上の
直ぐ裏迄昇る。此の昇降機たるや世にも恐ろしき
代物である。

構造は大抵天井板と底板と是れを確保する向ひ
合つた二面の鉄板である。乍然まだ、立派な
部類に這入るのだぞうだ。三池辺にある奴は底板
だけしかないのがある、底板の真中に一本棒が立
つて居て是れにつかまるのだぞうだ聞いただけ
でもぞつとする。高級品たる其の代物の鉄壁としが
みついて愈々昇る電鈴がなると一同目をつぶつて
居る。南無阿彌陀佛と云ひ度い気持である。耳が

が／＼鳴り出す頃になると一行は全く情けない顔付になって居る。下る時なんか壁の横棒から手を離すと「エレベーター」の中で体が空間に浮いてしまう様な気がする。換言せば物体へ此の場合身体が落下するより早く昇降機が落ちる様な気がする。と云ふ理である。落ちると云った方が正しいのである。坑内で散々油汗を流してやつと坑外に開放された頃は日はすっかり落ちて遙か下くに船津の町の灯がちら／＼と光って居た。

此の夜、船津の町始まって以来の大宴會が開かれた。列席者、本店側調査部長外三十数名、鉱業所及神岡水電關係の責任者二十数名船津の藝妓三十数名と云ふ大歓迎宴であつた。一切の費用は鉱業所の費用即ち會社員担であるから一同頗る應揚に構えて居る。

鉱業所長と調査部長とが型の如き仁義を取交はしてからさあ大宴である。到々翌日の三時迄飲み明かして旅館の夜具にくるまつたのも三、四時間位で早や朝である。

「第三日」船津町―神岡水電ダム―船津―高山―飛騨小坂取―下呂温泉―岐阜―東京
寐た時間が僅かであつた為め朝起きては酔が醒めないのは驚ろいた。

先ず朝の内に鹿間の亜鉛製煉場見学である。詳しい事は一寸とも分らない。只先ず鉛を取り、亜鉛を残し、更に金銀の電解と云つた順序であるさうだ。

真黒い土塊から亜鉛や金銀が出ると云ふ理である。こんな土塊でもあればこそ毎月多額へ（？）の給料が頂戴出来るのかと思ふと有難い極みである。此見学が済むと今度は船津町を貫流する高原川に沿つて一里半程下る。行つた処は鉾山會社の子會社になる神岡水力電気株式會社の「ダム」がある処である。峡谷を塞止めて水溜を造り此の水溜に依つて猪の谷發電所の發電能力に調整を保たしめて居る。

水電會社なんてものは出来れば誠にたわいもないのである。水さえ出て居れば現場には少數の従業員で結構である。夫れで商賣が出来る。重役は暇で困るだらうと思ふ。

それから船津の町に戻つて来て鉱業所の一同に別れたのは午前十時頃であつたかしら。自動車は／＼／＼神原峠を登る。振返ると遙か連峰の間から加賀の白山が顔を一寸出して居る。そして峠の墜道を出ると正面に乗鞍岳が新雪を戴いて陽に輝いて居る。誠にのんびりした飛騨の旅を思はせる。

成程此処が有名な飛騨の高山か、何んて、美しい処なんだらう、京都を小さくした様な町である。旅人宿の「何々屋」と書いた行燈がたまらなく嬉しい。町の中央辺に城山公園と云ふのがある。此地方には珍らしい立派な公園である。天然の美と人工の調節が如何にも良く考えられて居る。此処で中食をする。北アルプス連峰が一望の下にある。遙か下の寺からは晝の勤行でもあるのかゴーンと何とも云えない壮重な鐘の音が傳はつて来る。美しい山々を囲まれた平和な此の高山町に強い印象を受ける。共に山に対する強い執着が暇資金、會社の勤めを超越して湧き出して来るのを禁じ得なかつた。

時間は容赦なくたつて一行は飛騨小坂取に向ふ。現在は岐阜縣からの飛越線の終点であるが来月一日から富山に連絡するとか、僕が通つた時にも線路は既に出来上つて居た。

沿道に美しい小さい益田川を見て吃驚した。東京で地図を見て居る間に何時の間にか豪壯な益田川を胸に造り上げて居たからである。

下呂駅で下車。湯の島館と云ふ目黒の雅叙園張りの温泉旅館に少憩する。此の旅館には新婚旅行に来る者が沢山あるのか「妹背の間」「睦の間」

「幾世の間」「千世の間」等々各室の入口に看板が出て居るには少々煩負けた。いくら新婚でもない。新居旅行でも新婚らしく見えたくないのが人情だ、本科に入学した者が新しい帽子や徽章を襟裏に古くしてしまふのと同じである。

愈々岐阜縣に着いた。最後の宴會を長良川は金華山の対岸、鍾秀館に土地の美形を招いて開いた。一尺近くの鮎の焼物も今は忘れられないもの、一つである。

(程生)

ゴサソウヤマ 吳安々宇山 (六八二米突)

|| 廣島縣より東北二里に見える山 ||

十月十四日の日曜に久しぶりに山らしい山へ登つて見た。ゴサソウといふのは嶺の意味だとか或は五八霜の轉化で五月迄霜を見、八月己に次の霜が降る所から来てゐるとも謂はれてゐるが明確な所はわからないらしい。名前は兎に角として廣島附近の展望台としては最も優れた山である。尤も頂上へ行つて了ふと樹木に遮られて大した事もない。私は丁度親戚のものが東京から来てゐるのでその丁と二人で駅前から歩いて山陽道を東へ、途中湯品川を渡つて左折し府中村山田の龍仙寺傍か

ら笹峠を越へ安藝中野取の奥の畑質村水谷の部落へ出て水谷谷を遊行した。一寸武能沢に似てゐて可なり急峻な沢である。水量はない。道も勿論ない。然しどけ谷らしい谷が二時間たらずの場所にあるのは愉快である。六甲のロックガーデンなんか問題にならない様な岩壁が見上げて石側の方に降り立ってゐる。此の谷が山稜に近づいて来ると相當猛烈な藪になる、出てから左へ五分許り歩くと前に云った素晴らしい展望台がある、丁度八疊敷位の平な岩が突き出てゐる。穂高の唐沢の岩小屋の屋根を思ひ出して下さればいい。それこそ状態さへ良ければ四国の石垣なんかも見える相だが今日は晴れては居たが多少霜がかゝつて居た為め巖島さへ霞んでゐたが瓜島湾は一瞬の許にあり遠く周防、石見の方面にも相當山々の重疊たる有様がよく解る。十方山や縣下最高の山たる恐羅漢山へ一三四六米突ゝなんかも見えてゐたのであろうが驟りな解らなかつた。

帰途は六甲に似た花崗岩の風化した山稜を下り岩谷観音を經、清水谷神社から湯田街道に出た。此の岩谷観音にも相當面白い岩がある。巖島の彌山に登った人は知つてゐるであらうがあの上にも可なり大きな岩が剥き出しになつて今にも落ち相

になつてゐるが此処にも全じ様なのが沢山ある。まあ瓜島へ来たなら御案内するから是非一日だけ此の爲めに余分の日を用意して置いて貰いたい。

(熊)

虫の音

名譽ある針葉樹會報の何代目かの編輯者たる地位を興へられた僕が愚痴を陳べるのは身の程知らずの識を免れないかもしれないが、と断り書を置いて置いて。細り行く秋の虫にも似た悲痛な聲に暫らくは耳を傾けて戴きたい。

何故に斯うも寄稿者の顔振れが極りきつてゐるのだらう。曰く孫さん、熊さん、ペンちゃん、ス夕ケンカク、平家蟹氏ならびにヘル・コン。これだけのメンバーが顔を洗つては出直して居るに過ぎないのだし、甚だしい時には出直し続けにお目通りしてゐる程なのだ。幾ら彼等等の知慧叢が泥沼の如く底無しであらうにもせよ、これでは會報が饒々に話らないものになつてしまふ。こんな五六種のケモノしかゐない動物園が繁昌する道理もない。針葉樹會員は會報に對してどうしてこんな冷愼なんだらう。反對にどうしてこんなケチな動物園に満足して居るのだらう。僕が近頃山へ

行かないもんだから書く材料が無いんです。しとは常に聞く衆解である。果して然らば過去の會報をいま一度讀直して見給へ。こんな衆解が如何に無意味な、そして彼のケモノ謝氏の努力に対して如何に着づべきものであるか、自ら明瞭となるであらう。僕は文章が下手だから。しよして下さい。會報の記事は所謂作文ぢやないんですよ。第一、お互にうまいまいを言ふ程他人行儀の間柄ぢや無い筈、そんな事を言はれたら僕は急に極り悪くなつちまうと常連の或るケモノ氏が逆に顔を赤くした話もある位。

とは言ふものの、サア書き、今書けといったとて直ぐ書けるものではない。だから今に何か書いて見せるぞと心がけて置いて貰ひたい。其の道のオソリテイーに聞いた所に依れば、心がけて居ればネタは幾らも見付かるものだそう。現に僕なんか印刷屋から校正と一語に「何百何十何字不足だから直ぐ埋めて呉れ」と毎月言はれる。たった二時間か、その内のキツチリ何百何十何字かを無理にでもデツチ上げねばならぬのだ。長くともし短くともいけません。その苦勞と言つたら……ところと、勘定する字数が丁度だから此処で切上るが、諸君よ、とにかく頼みます

よ。宜しいか三度と一度は義理ですぜ。

(謝)

後記

- 追悼号は聯送が非常におくれて申訳有りませんでした。又思の外不出来で遺憾です。
- 嚴父宮川彦一節氏より針葉樹會一橋山岳部宛各五拾月づゝ御寄贈になりました。
- 山岳部で上品なバツヂを作りました。圖案は針葉樹六号、七号の裏表紙を飾るピツケル・ザイルの組合せそのまゝの極めて優美なものです。から充分御想像出来ませう。后領價九拾錢也。詳細は現役の堀岡君に御照會ありまし。
- 配本済の針葉樹七号の代金差月也を會計幹事鈴木英雄君宛に至急御納金願ひます。
- 斯らしい名義を作り同封致しました。

